なぜ感受性なのか(3)

村　上　吉　男

この拙論(3)は，シモーヌ・ヴェーユ独自の知覚なる〈感受性〉が彼女の学士論文『デカルトにおける科学と知覚』(1930年）に密かに展開されるという，前回(2)での筆者の主張をさらに明らかにさせる試論である。かかる証明をもって，そしてこの証明から(1)の註(２)の波線部分が再度問われる次回以降予定の(8)までをもって，筆者は連続稿である(1)から(8)の表題〈なぜ感受性なのか〉とした事由にはじめて答えられるのである。なぜなら，彼女がデカルトの知覚を語るにしろ，少なくも註(２)の波線部分は密かに展開される彼女独自の知覚〈感受性〉を見出せる箇所，その確たる転機となる箇所であると断言できるからである（この点の証明は以下をみたあとの次回以降に回さざるを得ないであろう)。

さて，前回を受け継ぐ拙論として最初に取り上げられねばならない問題は，デカルトにとって〈わたし〉あるいは精神とは何かということである。これについて参照すべきはデカルトの次なる引用文である。

Ⓙ①Qu'est-ce donc que je suis? Une chose qui pense. Qu'est-ce qu'une chose qui pense? C'est-à-dire une chose qui doute, qui conçoit, qui affirme, qui nie, qui veut, qui ne veut pas, qui imagine aussi, et qui sent.[1]

わたしとは何であるのか。思惟するものである。思惟するものとは何か。すなわち疑い，理解し，肯定し，否定し，意志し，意志しない，なおまた想像し，感覚するものである。

Ⓙ②Je suis une chose qui pense, C'est-à-dire qui doute, qui affirme, qui nie, qui connaît peu de choses, qui en ignore beaucoup, qui aime, qui hait, qui veut, qui ne veut pas, qui imagine aussi, et qui sent.[2]

わたしとは思惟するものである。すなわち疑い，肯定し，否定し，わずかなことを認識し，多くのことを知らず，愛し，憎み，意志し，意志しない，なおまた想像し，感覚するものである。

Ⓙの①②はそれぞれ第二省察，第三省察からの引用であるが，両者ではほぼ同じような内容が語られるとみてよい。その内容はどちらも〈わたしとは思惟するものである〉ことで合致し，〈思惟するものとは何か〉において，①にはない語句が②に記されるだけである。だが②のこの箇所でほかの語句が見出されていようとも，かかる語句はたんなる付け足しにすぎず，それ自体①の内容を相違させるわけではない。そのことは次の引用文によって明かされるであろう。

Ⓙ③Les facultés de vouloir, de sentir, de concevoir, etc., ne peuvent pas proprement être dites ses (mon esprit) parties: car le même esprit s'emploie tout entier à vouloir, et aussi tout entier à sentir, à concevoir, etc.[3](括弧内筆者)

意志し，感覚し，理解するなどの諸能力がわたしの精神の部分であるということは本来不可能である。なんとなれば意志し，感覚し，理解するなどもすべて同じ一つの精神であるからである。

すなわち，かかる語句は〈同じ一つの精神〉の諸「様態 façon ou mode」[4]を示し，〈同じ一つの精神〉として捉えられるということである。そればかりか，この①②に③を加えて考えると，〈わたし〉とは〈思惟するもの〉または〈精神〉，〈思惟するもの〉とは〈精神〉または〈わたし〉，〈精神〉とは〈わたし〉または〈思惟するもの〉に等しいこと，これによって〈わたし〉あるいは精神とは何かという問いには〈思惟するもの〉でしかないと答えることが導出できるのである。しかしこの①②③からのまとめのみで〈思惟するもの〉である〈わたし〉あるいは精神の全貌がみえるといえるのではない。それが可能になるのは，たとえば①における〈思惟する〉〈様態〉の〈疑い，理解し，肯定し，否定し，意志し，意志しない，なおまた想像し，感覚する〉がデカルトにあって，なぜ〈同じ一つの精神〉になり，いかにあるかを明かしてからのこと

であろう。

Ⓙの①に〈感覚する〉という語句がある。それを例にする他の引用文によってみれば，なぜ〈同じ一つの精神〉になるかが判明しよう。

Ⓚ Je suis le même qui sens, c'est-à-dire qui reçois et connais les choses comme par les organes des sens, puisqu'en effet je vois la lumière, j'ouïs le bruit, je ressens la chaleur. Mais l'on me dira que ces apparences sont fausses et que je dors. Qu'il soit ainsi; toutefois, à tout le moins, il est très certain qu'il me semble que je vois, que j'ouïs, et que je m'échauffe; et c'est proprement ce qui en moi s'appelle sentir, et cela, pris ainsi précisément, n'est rien autre chose que penser.[5]

この同じわたしは感覚するものである。すなわち，実際わたしは光を見，騒音を聞き，熱を感覚する以上，事物を感覚器を介して受け入れたり，認識したりするものである。だがこれらは見せ掛けであり，わたしが眠っているからだそうだ。かくあるやもしれぬが，しかし少なくもわたしは見る，聞く，熱くなる（熱を感覚する）と思われるということはきわめて確かなのである。これこそまさしく，わたしにおいて感覚すると呼ばれるものであり，このように正確に解釈するならば，これは思惟する以外の何ものでなくなるのである。(括弧内筆者)

筆者は前回取り上げた最初と二番目の文章の一部[6]を，それ以下の文章との関係から再度用いることにする。なぜならこの引用文に記される〈感覚する sentir〉こそ〈同じ一つの精神〉になる事由を，また〈感覚器〉(身体) における感覚 sens との区別を明確にさせるからである。まず前者にあって，〈感覚する sentir〉とは〈見る，聞く，熱くなる（熱を感覚する）と思われる〉こと，それがまさに〈思惟する penser〉ことであると捉えねばならない。だから，〈思惟する penser〉ことなしに，〈わたし〉または〈精神〉が〈わたし〉や〈精神〉であることは不可能であり，その〈わたし〉や〈精神〉の能力として〈感覚する sentir〉があるといえよう。この一例からⒿ①の〈疑い，理解し，肯定し，否定し，意志し，意志しない，なおまた想像(する)〉も，〈疑うと思われる，理解すると思われる，肯定すると思われる，否定すると思われる，意志すると思われる，意志しないと思われる，なおまた想像すると思われる〉という〈精神〉の〈思惟する penser〉ことに相当し，これらの〈一つ〉一つ

がすべて〈同じ〉〈精神〉の能力になるのである。要するに，これらは前記した〈思惟する penser〉〈様態〉のさまざまを示すしかない，換言すると〈思惟する penser〉はこれらを，またⒿ①にはないⒿ②の〈わずかなことを認識し，多くのことを知らず，愛し，憎(む)〉をも含んだ総称として用いられるにすぎない。そしてこれは，Ⓙ①②のさまざまな〈様態〉がデカルトにあって，いかにあるかの最初の答えとなる。

次に，〈感覚する sentir〉はなぜ〈感覚器〉(身体) における感覚 sens と区別されるかが問われる。だがこの問いはいったい成り立つのであろうか。なんとなれば，〈感覚する sentir〉が〈光を見，騒音を聞き，熱くなる（熱を感覚する）と思われる〉であるかぎり，そこに〈光を見，騒音を聞き，熱を感覚する〉という〈感覚器〉(身体) における感覚 sens が保有されるからであり，また〈わたし〉または〈精神〉がⓀに〈事物を感覚器を介して受け入れ(る)〉と記されるかぎり，〈感覚する sentir〉にはこの〈事物（感覚 sens)〉が不可欠であるとみることができるからである。それゆえ，たとえば〈熱くなる（熱を感覚する）と思われる〉という〈感覚する sentir〉と，〈熱を感覚する〉感覚 sens とは区別して捉えるに及ばないといえる。

だがデカルトは，〈わたし〉または〈精神〉が〈事物を感覚器を介して受け入れ(る)〉にしろ，この〈事物（感覚 sens)〉は脳たる身体によって〈受け入れ〉られると，換言すると脳の『松果腺 glande pinéale』[7]が身体の諸感覚器の諸感覚を取り込む器官，いわゆる『共通感覚 sens commun』[8]の器官になるとみなして，その感覚 sens と〈感覚する sentir〉を，とどのつまり脳たる身体は〈わたし〉または〈精神〉ではないことを区別する。それではいかにすれば，〈精神〉の〈感覚する sentir〉になることが可能であろうか。

再び，〈光を見，騒音を聞き，熱を感覚する〉ことのうち，〈熱を感覚する〉に例をとると，かかる感覚 sens は〈共通感覚〉たる〈松果腺〉(身体) に〈受け入れ〉られよう。だがこのことは〈熱を感覚する〉脳たる身体の感覚 sens と，〈精神〉の〈感覚する sentir〉とが関係づけられてあることを意味しない。筆者は〈精神〉の〈感覚する sentir〉が〈松果腺〉(身体) に〈受け入れ〉られる感覚 sens に対する働きかけによってはじめて関係するし，働きかけ自体が〈熱くなる（熱を感覚する）と思われる〉つまり〈感覚する sentir〉にふさわしくあるとひとまず理解する。かつ，この働きかけから，

〈精神〉は〈熱を感覚する〉という身体の感覚 sens でなく，sentiment なる感覚を新たに生み出す，あわせて，身体とは無関係になるこの sentiment のことからも，〈わたし〉あるいは精神（の全貌）とは何かをさらに問い質すことが可能になり，デカルトはかかる区別を試みる以外に，〈真理の探求〉を確立させ得ないとひとまず理解する。

この区別はまた，Ⓚ中〈わたしは熱を感覚する〉や〈わたしは熱くなる〉のそれぞれの動詞〈ressentir〉と〈s'échauffer〉の比較によって確認できる。だがここでは，筆者は後者の動詞をⓀの最後の引用文の文意から〈感覚する sentir〉に換言させて捉え得ると判断し，〈ressentir〉と〈sentir〉をもって比較する。それぞれはむろん，前者が身体に，後者が精神に対し用いられる動詞となる。前者の〈ressentir〉は，〈見(る)〉や〈聞(く)〉の視覚と聴覚と同様に並置される動詞，〈熱〉を〈感覚する〉ことの感覚（温覚）であり，何よりもまず〈熱〉が〈感覚器〉を温覚として刺激するに等しいということができる。さらにこの〈感覚器〉は外的〈感覚器〉に，〈刺激する〉はⓀの〈受け入れ(る)〉の一つの意味に換言されると理解できる。すると，〈受け入れ(る)〉とは何もその外的〈感覚器〉ばかりでないことが次の引用文によって読み取れるのである。

Ⓛ Ces objets (de nos sens) qui, excitant quelques mouvements dans les organes des sens extérieurs, en excitent aussi par l'entremise des nerfs dans le cerveau, lesquels font que l'âme les sent.[9](括弧内筆者)

わたしたちの感覚の対象は，外的感覚器のなかにある運動を引き起こしつつ，神経を介して脳のなかにその同じ運動を引き起こすのであり，この脳のなかの運動が精神をしてわたしたちの感覚の対象を感覚せしめるのである。

この引用文にあって，〈脳のなかに〉の〈脳〉は前記した〈松果腺〉をさし，いわばこの内的〈感覚器〉は〈対象〉を〈受け入れ(る)〉とみることができる。なぜか。それは〈ある運動〉や〈その同じ運動〉を〈引き起こす〉との記述によって明らかとなる。すなわち，〈(運動を）引き起こす〉とある以上，それ自体は事前に〈対象〉を外的と内的〈感覚器〉それぞれで〈受け入れ〉ていなければならぬからである。それなしにいかなる〈(運動を）引き起こす〉ことも

不可能である。この引用文に〈ressentir〉が記されずとも，まさに〈ressentir〉こそ，〈対象〉を〈受け入れ(る)〉，この〈運動〉を〈引き起こす〉となる必要がある。換言すると〈ressentir〉は刺激と反射を含意させると把握する。かつかかる〈ressentir〉が〈外的感覚器〉や内的〈感覚器〉で可能になるのは，前者に〈受け入れ〉られる〈対象〉が反射されて後者に伝わるからである。後者は前者の反射を刺激として〈受け入れ(る)〉し，またこの刺激を〈運動〉として〈引き起こす〉のである。こうした意味で〈re(s)〉なのだ。

それゆえ，前紀要の引用文Ⓒや Ⓗ[10]ならびに本稿Ⓚ中の〈感覚器〉は外的内的の両〈感覚器〉をさすとみるほかない。なおまたデカルトにあって，〈運動〉は〈思惟するもの〉[11]でなく，身体の自動機械[12]によるし，〈外的感覚器〉での〈ressentir〉の〈対象〉はすべて内的〈感覚器〉に伝達されると捉えるしかない。

さらに，〈受け入れ(る)〉は注意すべき動詞である。とりわけ前紀要のⒷやⒸまたはⓀの〈recevoir〉がこれに相当する。なんとなれば，筆者は先にこの〈recevoir〉を，たとえばⓀに〈熱を感覚する以上，事物を感覚器を介して受け入れ〉と記されるところより，〈熱を感覚する〉〈感覚器〉を強調する点において，外的や内的の〈感覚器〉への刺激に見立てたが，今度は同じⓀをばこれと異なった意味で理解し得るからである。つまりⓀの〈recevoir〉にはもう一つの意味があるということだ。その出所は〈事物を...受け入れたり，認識したりする〉という箇所にある。〈recevoir〉は〈connaître〉と同列に置かれるかぎり，身体ではなく精神における動詞なのであり，もとより〈sentir〉に置換されて使用されるのである。要するにこの〈sentir〉が精神で〈受け入れ(る)〉とは，脳たる身体の〈松果腺〉で反射する〈対象（事物)〉に〈働きかける〉ことである。

しかしここでは，かかる〈sentir〉のことは以上だけにして，外的や内的〈感覚器〉における〈ressentir〉がある視点から検討される。なぜ検討するかは，〈ressentir〉が以下に掲げる引用文Ⓜ①②によって改めて問われるからである。〈ressentir〉が外的や内的〈感覚器〉に関与する以外に用いられるとすれば，しかもそこに〈真理の探求〉や〈日常的用法〉の視点を導入させて語るとすれば，〈ressentir〉はいったい何か，いかに理解されるのかなのである。デカルトが〈精神〉の能力として使う〈sentir〉に接頭辞〈re(s)〉の加わる

この〈ressentir〉は調べたかぎり，諸作品[13]中の《省察》にのみ10回出てくる[14]。まず，〈外的感覚器〉（これは〈内的感覚器〉である脳の〈松果腺〉以外のすべてをさすとみなす。だから内臓なども本来〈内的感覚器〉であるが，それすら便宜的に〈外的感覚器〉とする）に関与する〈ressentir〉の例として，〈je ressens la chaleur〉[15]，〈je ressentais...la faim，la soif〉[16]，〈je ressens de la douleur au pied〉[17]などが取り上げられるであろう。これらはそれぞれ温覚，内的感覚，痛覚でしかないし，温覚に代表させてすでに記したことであるから，その説明はもはや必要としないであろう。問題は次の場合なのである。たとえば《省察》に《情念論》から抜き出した先の引用文Ⓛに似た内容の箇所がある。そこでは，足に受けた傷で〈引き起こ exciter〉される〈運動 mouvement〉（これは〈外的感覚器〉における反射である）と同じ運動が〈脳のなかに dans le cerveau〉に〈引き起こ〉される（これは〈内的感覚器〉における反射である）と述べたあとで，さらにデカルトはいう。

Ⓜ①Il sera nécessaire que l'esprit ressente dans le pied la même douleur que s'il y avait reçu une blessure.[18]

精神は，足が傷を受けたときと同じ痛み（苦しみ）を感覚することが必要であろう。（括弧内も筆者）

Ⓛと Ⓜ①の引用文で後者が前者より具体的な例を提示する以外に，両引用文が多少異なりをみせるのは，後者には前者の〈âme〉ではなく，〈esprit〉が同じ〈精神〉をあらわす語として使われたり，〈ressentir〉なる語が明確に記されたりすることである。また類似するところは〈精神〉が脳とは別であるとする点なのである。換言すると脳は精神でなく身体である。するとこのことは，〈外的感覚器〉や〈内的感覚器〉たる身体に関与して使用されるだけの〈ressentir〉がⓂ①において〈精神〉にも使われる，つまり〈精神〉のなかでも反射することを示唆させるのであろうか。もう一つの引用文が参照される。

Ⓜ②Et quoiqu'en approchant du feu je sente de la chaleur, et même que m'en approchant un peu trop près je ressente de la douleur, il n'y a toutefois aucune raison qui me puisse persuader qu'il y a dans le feu

quelque chose de semblable à cette chaleur, non plus qu'à cette douleur; mais seulement j'ai raison de croire qu'il y a quelque chose en lui, quelle qu'elle puisse être, qui excite en moi ces sentiments de chaleur ou de douleur.[19](傍線部分筆者)

また，わたしは火に接近すると，熱を感覚するし，あまりに接近しすぎると，痛み（苦しみ）を感覚するとはいえ，しかし火のなかにその熱さらにその痛み（苦しみ）に似たものがあるとわたしを説得し得るいかなる理由もない。ただ火のなかに熱あるいは痛み（苦しみ）の感覚をわたしに引き起こすものがいかなるものであろうとも，あると信じるのは正しいことなのである。（括弧内も筆者）

Ⓜ②は一見，身体と同じ〈ressentir〉が〈精神〉にあるということができる。なんとなれば，〈ressentir〉が〈sentir〉とともに使われるごとく記されるからであり，すでにみたように〈sentir〉は〈精神〉の能力，〈精神〉はここでも〈わたし〉になるといえるからである。とすればこの引用文は，身体とは別の新たな〈ressentir〉のあることを暗示させるのか，それともそうではないといい通すものであろうか。いずれにせよ，その答えが同時に，〈ressentir〉はいったい何か，いかに理解されるかへの答えとなることも確実であろう。

これらのことをまずは，Ⓜ②の傍線部分が示すことから語っていこう。そこの意味は，〈わたし〉は〈火〉を見たり，もしや〈火〉に触れたりすることが何より先にこようが，しかし〈火〉そのものをではなく，〈火〉からその〈熱を感覚する sentir de la chaleur〉，さらにその〈痛み（苦しみ）を感覚する ressentir de la douleur〉ということである（だから〈わたし〉はまた〈熱〉自体や〈痛み（苦しみ）〉自体を〈感覚する〉のでもないことになる。また〈わたしは熱を感覚する〉におけるⓀの〈je ressens la chaleur〉とⓂ②の接続法表記の〈je sente de la chaleur〉との〈わたし je〉については後述に譲る）。このとき，〈熱を感覚する〉には今記したごとき二つの表現があることを知る。すなわち㋑〈ressentir la chaleur〉と㋺〈sentir de la chaleur〉である。冠詞（㋑は総称㋺は部分冠詞）の相違はともかく，かつ〈ressentir〉と〈sentir〉の相違説明ももはや割愛されるとして，筆者がここで主張したいのは，㋑が㋩〈ressentir de la douleur〉になるのではなく，㋺が㋩になること，なお付記すべきは，㋺〈sentir de la chaleur〉がⓀの訳〈熱くなる（熱

を感覚する）と思われる〉とした括弧内の語句に該当してくるということである。ちなみに〈熱くなる〉という方の s'échauffer は再帰的用法の代名動詞ゆえに，再帰代名詞を〈わたし（精神)〉とみると同時に，その〈わたし〉が〈熱くなる〉のであって，それ以外（たとえば身体）が〈熱くなる〉のでは決してない。そしてここでも㋺と同様，〈わたし（精神)〉が〈熱くなる〉こと自体をでなく，その《刻印（印象）impression》を〈感覚する sentir〉ということができる。

さて，㋑〈ressentir la chaleur〉が㋩〈ressentir de la douleur〉になるのではないのは，たとえ㋑㋩の動詞が同じであっても，㋩の動詞は少なくも㋑のそれと同じ用法にあるとみることが不可能になるからである。㋑の動詞は身体で，㋩のそれは〈sentir〉と同じく精神で使用される ressentir である。㋑は〈松果腺〉なる〈共通感覚〉の器官において，最終的な反射（〈引き起こす〉はⓗ（前紀要）に causer，Ⓛや Ⓜ②（本稿）に exciter として出る）をなす動詞である。〈sentir〉はこの反射に〈働きかける〉役割にある動詞である（〈働きかける〉とは反射を捉えることである。別言すると，反射はあくまで身体の『動物精気 esprits animaux』の〈運動〉によるのであり，sentir はこの反射を〈精神〉の〈刻印〉として〈感覚する〉ことになる。なお後段にて〈働きかける〉とは〈能動 action〉であることを知るであろう)。すると，〈sentir〉と同様に用いられる〈ressentir〉も〈働きかける〉役割になければならぬ動詞になろう。ここから後者の動詞は前者のそれに準じることが導き出される。しかもその準じ方は，たとえばⓂ①の〈l'esprit ressente...la même douleur〉とⓂ②の〈je ressente de la douleur〉（Ⓜ②は㋩〈ressentir de la douleur〉と同様にみる）のそれぞれにあって，一つの段階を踏むところにある。後者のⓂ②また㋩のその段階はすぐ察知される。すなわち㋩が生じるには㋺〈sentir de la chaleur〉を前提になすことが不可欠なのである（だから前記した通り，㋺が㋩になる，つまり sentir から ressentir へと段階を踏むといえる)。ここから前者のⓂ①について以下のごとく推測できる。Ⓜ①の〈精神は，...同じ痛み（苦しみ）を感覚する〉の〈ressentir〉は，たとえば註(17)としてすでに引用した原文〈je ressens de la douleur au pied〉でいうと，註(17)が原文以下にある〈sentir de la douleur à l'esprit〉[20]とかかわりをみせるのだから，この二つの原文の〈ressentir〉から〈sentir〉への

段階を踏むのと同じように，この場合後者の〈sentir〉と関係して使用されなければならない。註(17)の〈わたしは足に痛みを感覚する〉の〈ressentir〉は足の〈外的感覚器〉ならびに〈内的感覚器〉という身体での反射であり，この反射に〈sentir〉が〈働きかけ〉て，註(20)の〈精神に痛み（苦しみ）を感覚する sentir〉が生じる。ここに注目し，さらに註(20)が〈わたし（精神）は痛み（苦しみ）を感覚する〉に置換されるとみなしていうと，Ⓜ①の〈ressentir〉の用法は，何よりもまずこの〈精神は痛み（苦しみ）を感覚する sentir〉という前提に立って，Ⓜ①全体を〈精神は，...（再度その）同じ痛み（苦しみ）を（sentir より強く）感覚する ressentir〉とするところに見出されるということができるのである。それゆえ，この〈ressentir〉は決して身体に用いられるのではない。これはたんに〈再度強く〉という意味での接頭辞〈res〉を〈sentir〉に加えるにすぎない〈ressentir〉であるといえる。換言してもこれは本来〈sentir〉の用法と同じになるとしかいい得ないのである。しかしそれはなぜなのか。

Ⓜ①と②のある《省察》が〈真理の探求〉を目ざす作品であるかぎり，身体で使用される〈ressentir〉の反射が〈精神〉というところで可能になるといってはならないことがその事由として取り上げられる。別言すると，〈sentir〉が〈内的感覚器〉に〈働きかけ〉ねばならぬと前記したが，しかしそれこそが〈真理の探求〉にとって不可欠なことなのであるということになる。〈真理の探求〉において，〈sentir〉が〈内的感覚器〉に〈働きかける〉とは何か，詳しい説明が要求される。〈内的感覚器〉は脳の〈松果腺〉たる〈共通感覚〉の器官である。身体の〈ressentir〉はその器官で反射しよう。だが反射自体はこの器官にとどまってはならず，その器官を出る（離れる）必要がある。もしその器官にとどまる反射に〈働きかける〉〈精神〉のこの〈sentir〉であるならば，〈sentir〉は器官（身体）に与するから，〈精神〉の能力ではなくなるであろう。だから〈sentir〉は器官の外側での反射に〈働きかける〉ことになるとみるしかない。なんとなれば，器官の外側はすでに器官（身体）としての物質や空間ではないし，この非物質的で非空間的なものがまさしくデカルトの〈精神〉であるといえるからである（たとえば前紀要の引用文①や本稿Ⓛに〈(脳の）神経を介して〉とあり，かつ実際脳の〈松果腺〉たる器官には四方に無数なほどの神経が分かれていることを踏まえるならば，デカルトの

〈精神〉とは何かという一考がさらに必要であろう。ここではそれに立ち入ることをせずに，以下の疑問を投げかけておくだけにする。神経も器官と同様物質であるし，〈動物精気〉の〈運動（反射）〉が神経で伝達されるとみるかぎり，非物質的非空間的な〈精神〉の〈働きかける sentir〉はかかる神経において可能にならないのでなかろうか。それとも神経は器官と同じではないとして，デカルトは神経を物質や空間とは捉えなかったのであろうか)。ただこの疑問とは逆に，神経を，あるいは脳の器官以外の神経の含まれる非物質的非空間的なる外側をばデカルトの〈精神〉とみなすとき，反射は反射でなくなるであろう。なんとなれば，そこは当然〈精神〉とみられる以上，〈sentir〉の〈働きかけ（能動）〉によって，身体の反射たる sens（感覚）とは異なる〈精神〉としての新たな sentiment（感覚）が生まれていなければならぬからである。このように，身体の sens と精神の sentiment とが明確に区別されるのが〈真理の探求〉の場合なのである。だから身体の〈ressentir〉とその sens が，また精神の〈sentir（あるいは ressentir)〉とその sentiment とが身体と精神のおのおので欠かせないことになる。だから万が一身体の〈ressentir〉の反射が精神で可能になるならば（たとえば前紀要の引用文⑭（これは〈日常的用法〉にある文章である）に〈身体がわたしたちの感覚器（これは〈内的感覚器〉に相当するであろう）においてあまりに強い諸印象を引き起こす〉と記される通りになるならば)，精神にはこの場合，〈sentir〉の〈働きかけ（能動）〉による sentiment を生み出すというより，sens があって（⑪参照)，また精神は身体（脳）であってよいことになり，それこそ心身分離が目標の〈真理の探求〉は崩壊させられてしまうのであろう。別言すると，〈動物精気〉の〈運動〉にほかならない身体の反射（〈運動〉ressentir）が精神で現実になると，〈真理の探求〉にあって〈動物〉としての身体と〈わたし（人間)〉としての〈精神〉とが無関係ではなくなるということである。〈真理の探求〉であり続けるには，何んとしても〈精神〉の〈sentir〉または〈ressentir〉をはじめとする諸能力が身体の反射に〈働きかける〉ことでなければならぬのである。とりわけここでいう〈働きかける〉〈sentir〉こそ，心身不合一の鍵となる能力であり，その際デカルトによって語られる知覚（思惟）のすべてはこれを基本にして出発するといって過言ではなかろう。

なおまた誰も次のことに異義を唱えはしないであろう。すなわち〈真理の探

求〉に立ってみると，〈わたしは熱を感覚する〉という表現の〈わたし je〉とは，Ⓜ②が〈je sente de la chaleur〉であるかぎり，〈精神〉であるということを。だが註(15)やⓀが〈je ressens la chaleur〉であるとき，この〈わたし je〉も〈精神〉であるといい得るのか，それとも〈je〉は身体であり，身体が〈熱を感覚する〉とみてよいのであろうか。デカルトに質すことにしよう。

Ⓝ Je croyais que ce corps (lequel par un certain droit particulier j'appelais mien) m'appartenait plus proprement et plus étroitement que pas un autre.[21]

（わたしがある特殊な権利によってわたしのものと名付ける）この身体は，物体以上により適確に，より親密にわたしに属することを，わたしは信じていた。

〈ある特殊な権利〉とは，身体が〈わたしに属〉し，〈わたしは身体から切り離されることができない〉[22]という〈様態〉を〈わたし〉が保有する資格をさすにちがいない。しかしこれは《省察》からの引用であるにしろ，そこからいかなることが理解され得るのか。まず，〈真理の探求〉を目ざす《省察》の一文ゆえに，身体が〈わたしに属する〉ことは，身体が全面的に〈わたし〉であるのでなく，部分的に〈わたし〉なる〈実体に内在する être en la substance〉[23]こと，〈わたしは身体から切り離されることができない〉とて同様に，〈わたし（精神）〉が身体を全面的にでなく，部分的に内在させることを知る。そして，部分的にであるとしても，〈わたし（精神）〉と身体とが関係するとなすことは，そこから《情念論》（1649年）を待たずに，一早くこの《省察》（1641年）に〈日常的用法〉が，その心身合一がかいまみられることを知る。

しかしながら筆者は《情念論》においてさえ，〈精神〉と身体の本来あり得べき身体を基本にした合一が表面には出ないとみる。〈真理の探求〉に言及した際の箇所（五段落前の後半（〈万が一〉以下の）部分）で知る通り，この心身合一はデカルトにとっても，身体の〈ressentir〉が精神で反射し，そのsens（感覚）が精神にあるとみなされなくてはならない。それこそ心理学や生理学の今日的知見に合致してこよう。ところがデカルトはこの視点だけでなしに心身を合一させる。そのとき，デカルトは心身合一をば〈わたし（精神）〉に身体を部分的に取り込ませる〈わたし（精神）〉を優先させて捉えるのである。

このためか，身体の〈ressentir〉や sens よりも，sentir[24]や sentiment[25]の方が強調される（反射〈ressentir〉の sens が脳の〈松果腺〉の外側に出る（ある）やいなや，その〈精神〉は〈sentir〉の〈働きかけ（能動)〉によって，sens とは異なる新たな sentiment を生み出すのであった)。たとえば註(24)と(25)の引用文中のⒽでは，〈sentir〉の〈働きかけ（能動)〉のもとで〈一般に身体がわたしたちの真近にある〉と記され，Ⓑでは〈受け入れる recevoir〉の〈sentir〉なしに（〈働きかけ〉は〈受け入れる〉ことでもある)，sentiment（感覚）が生じてこないと語られる。それではそこに〈ressentir〉や sens のいかなる形跡もないと結語すべきか。否であろう。前述にならい，いかに新たな sentiment が生まれるといえども，この sentiment には身体の〈ressentir〉や sens の部分的な影響がみられると理解する必要があるし，それこそ身体が〈わたし（精神)〉に部分的にかかわるという意味になる。たとえばⓁの〈脳のなかの運動（これは反射〈ressentir〉である）が精神をしてわたしたちの感覚の対象（これは sens である）を感覚する sentir〉こと，Ⓑの〈わたしは...（〈sentir〉の）感覚 sentiment によって，好都合（や）不都合（Ⓛでいうと〈わたしたちの感覚の対象〉）を見分け〉ること，さらにⒾの〈運動はわたしたちによって，まさしくわたしたちの sentiment，すなわちわたしたちの感覚（的印象）sens たる知覚と呼ばれる〉ことが部分的にかかわることを明かす（P4と5の〈ひとまず〉の言はここで解消する)。

だがたとえそうであるにせよ，Ⓕの〈感覚 sentiment は，その感覚の部分（部分とは脳の〈松果腺〉の外側（精神）をさす）においてわたしにかかわり，その感覚の部分から切り離される他の身体の部分（傍点部分は〈他〉が脳の〈松果腺〉のほかを示唆させるが，しかしこれを含めた身体の部分をさすとみる）においてわたしにかかわることはない〉とデカルトがいう以上，脳の〈松果腺〉をはじめとする身体が〈わたし（精神)〉に部分的にかかわるとみなす根拠は，それが脳の〈松果腺〉（身体）における反射〈ressentir〉にもっぱらあると認めるよりも，デカルトが〈sentir〉の〈働きかけ（能動)〉による sentiment の方をどうしても強調するところにあると捉えられるのである。だから，デカルトの〈日常的用法〉はそれを成り立たせるにしろ，何より〈精神〉をよりどころにした心身合一を優先させることにあるのだ。換言すると，この心身合一は〈日常的用法〉においても身体をよりどころにしたそれではな

く，〈真理の探求〉を執拗なほど意識した心身合一であるといえよう。

身体をよりどころにした心身合一にとって，繰返すが〈sentir〉の〈働きかけ（能動）〉は不必要になろう。なんとなればそれに代わる身体の〈ressentir〉が精神で sens（sentiment）をもたらすごとく反射するからである（〈真理の探求〉が眼中にあるデカルトはこれ以外の〈日常的用法〉を構想する）。ただこの場合でも，〈再度強く〉という精神の〈ressentir〉（たとえばⓂ①②）をば身体の〈ressentir〉と見誤ってはならない。その ressentir を身体の〈ressentir〉とみなすと，身体の〈ressentir〉が精神で反射して sens（sentiment）を生み出すから，身体をよりどころにした心身合一があることになる。この sentiment は〈真理の探求〉で指摘し，かつ〈日常的用法〉で優先されたそれではない。身体をよりどころにした心身合一での sentiment なのだ（後述）。デカルトは二つの〈日常的用法〉を使い分けるようにみえるが，この sentiment には〈sentir や ressentir〉は関係しない。なぜなら，〈精神〉にある〈ressentir〉が身体の〈ressentir〉であるならば，それは〈精神〉をよりどころにした心身合一をばかりか，〈真理の探求〉さえも不成立に終わらせるからである。それはどこまでも精神の〈ressentir〉であるし，その〈ressentir〉が〈再度強く〉身体の〈ressentir（反射）〉に〈働きかける〉（後者は〈精神〉において反射しない）ことによって，〈精神〉をよりどころにした心身合一を，また〈真理の探求〉を踏まえさせることを明示するのでもある。

しかし筆者は，〈精神〉をよりどころにした心身合一があるとするのはたんに，〈真理の探求〉の〈sentir〉が働きかけて sentiment を生み出す契機となるところの，身体と〈精神〉とが部分的にかかわることにあるという事由だけから語られるのかを確認せねばならぬであろう。これについては以下の引用文が参照される。

◎①Il me semble qu'on peut généralement les (les passions) définir des perceptions, ou des sentiments, ou des émotions de l'âme, qu'on rapporte particulièrement à elle.[26]（括弧内筆者）

一般的に，精神にとりわけ関係づけられる情念は，精神の知覚，あるいは精神の感覚，あるいは精神の情動と定義され得るとわたしには思われる。

◎②On peut généralement nommer passions toutes les pensées qui sont ainsi excitées en l'âme sans le concours de sa volonté, et par conséquent, sans aucune action qui vienne d'elle, par les seules impressions qui sont dans le cerveau, car tout ce qui n'est point action est passion. Mais on restreint ordinairement ce nom aux pensées qui sont causées par quelque particulière agitation des esprits. Car celles qui viennent des objets extérieurs, ou bien des dispositions intérieures du corps, comme la perception des couleurs, des sons, des odeurs, la faim, la soif, la douleur et semblables, se nomment des sentiments, les uns extérieurs, les autres intérieurs.[27]

受動は一般的に，脳のなかにある諸印象だけによって，意志の協力なしに，それゆえ精神から生じるいかなる能動もなしに精神に引き起こされるすべての思惟と名付けられる。なぜなら少しも能動でないすべてのものは受動であるからだ。しかし通常，この名前は精気のある独自の運動によって引き起こされる思惟に限定される。なぜなら色，音，香り，飢え，渇き，痛み，他の同様なもののような，外的対象から，あるいはまた身体の内的状態から生じる受動は感覚と，一方は外的感覚と，他方は内的感覚と名付けられる。

◎③Car en effet tous ces sentiments de faim, de soif, de douleur, etc., ne sont autre chose que de certaines façons confuses de penser, qui proviennent et dépendent de l'union et comme du mélange de l'esprit avec le corps.[28]

というのも飢え，渇き，痛みなどをはじめとするすべての感覚は，精神と身体の合一，いわばかかる混交から生じ，これに依存する，ある混乱した思惟様態にほかならないのだから。

◎④Ces sentiments ne procèdent point d'elle (l'âme) seule, en tant qu'elle est une chose qui pense, mais en tant qu'elle est unie à une chose étendue qui se meut par la disposition de ses organes, qu'on nomme proprement le corps d'un homme.[29](括弧内または傍線部分は筆者)

これらの感覚は，精神が思惟するものであるかぎり，少しも精神に由来するのではなくて，精神が諸器官の状態によって動く延長的なもの（それを人間の身体と呼ぶ）に結合されるかぎり，精神に由来する。

長い文章も含まれる◎の①から④までの引用文は筆者なりに，番号の順に従うでもなく次のように説明されよう。まず◎④全体は〈日常的用法〉での心身合一を語るが，とくにその傍線部分の〈精神が思惟するものであるかぎり〉に注意すると，〈真理の探求〉の視点が予想されるゆえに，それを加味させた〈日常的用法〉となって捉えられる（かかる心身合一があるという証しである)。次に傍線部分以降のすべての文意は当然，〈精神〉と身体が〈結合される〉ところとなって〈日常的用法〉を示すことになる。また傍線部分の冒頭の〈Ces sentiments〉の指示形容詞 ces は，他の引用文中の単語でいえば，◎②の〈les couleurs, les sons, les odeurs, la faim, la soif, la douleur et semblables〉をさすであろう（◎③にも同じ単語が見受けられる)。そして以上から，とりあえずこの④を出発点にして，〈日常的用法〉が検討されなければならなくなるのである。

〈日常的用法〉はもとより，〈真理の探求〉にあっては本来〈思惟するもの〉を〈実体〉となす〈精神〉と無関係であるとみなされるところの，〈延長（的なもの)〉を〈実体〉となす身体が，その〈精神〉と〈結合（合一）される〉ことを証す思想である（〈実体〉については前紀要引用文Ⓖ参照)。それはデカルトが心身をいかに結合させるかを問うたものである。そのときデカルトは身体が進んで〈精神〉に結合する見方を選択せずに，◎④でいうごとく〈精神が...身体に結合される〉と語って，〈精神〉を前面に押し出すことになる。別言するとこれは，デカルトをしてこの心身合一をば身体をではなしに，〈精神〉を軸に展開せしめることを，つまりこの心身合一が身体をよりどころにしたそれであるよりは，〈精神〉をよりどころにした心身合一を意味させる。それを証明するのが sentiment である。この sentiment はまた身体の sens の sentiment 化したそれでなく，◎①の〈精神の感覚〉である。これが後者の心身合一の成立に向けて，身体の精神への部分的関係と関連する事由になるであろう。

筆者は〈日常的用法〉下の前段でいう後者，つまり〈精神〉をよりどころにした心身合一での sentiment は，〈真理の探求〉におけるそれの用法であるとみる。〈真理の探求〉のそれは◎④の〈精神が思惟するものであるかぎり〉〈精神に由来する〉のであり，筆者は前段に記した通り，この◎④の傍線部分中の語句の事由において，それが〈真理の探求〉との関係をあらわすにちがい

ないと述べたのである。だから◎④の sentiment なる一語には二つの内容を付加し使うことが示唆される。一つは今も記した〈真理の探求〉での sentiment であり，以下に簡略して振返るそれである。この sentiment は身体の〈ressentir（反射)〉の sens（感覚）とは異なる sentiment のことを意味させたし，〈精神〉の〈sentir〉の〈働きかけ（能動)〉のおかげで，はじめ〈精神〉が身体の〈ressentir〉の sens 的要素に〈部分的に〉かかわるとみえようが（傍点部分がさらに〈情念〉の〈日常的用法〉の要因になろう)，最終的にはそのかかわりとも切り離された sentiment として了解される。

もう一つが◎④で主に語られる〈日常的用法〉での sentiment である。これは身体の〈ressentir〉の sens（感覚）が〈精神〉に取り入れられることを示す sentiment であり，いわば sens そのものを意味するそれである。すなわち，◎④の〈諸器官の状態によって動く〉あるいは◎②の〈精気のある独自の運動によって引き起こされる〉[30]ことに発する sens が〈精神の感覚 sentiment〉にならなければ，この sentiment が同時に，◎②の〈色，音，香り〉をして〈外的感覚 sentiments extérieurs〉と，同②の〈飢え，渇き，痛み〉をして〈内的感覚 sentiments intérieurs〉とに区別せしめられはしないし，これこそ身体をよりどころにした心身合一の sentiment になろう。

だがこの〈日常的用法〉下の sentiment がなぜかかるように理解されねばならぬのか。これは◎②の〈意志の協力なしに，それゆえ精神から生じるいかなる能動もなしに〉を踏まえずに答えが見出されてこないのである。すでに〈sentir〉にて説明した通り，〈真理の探求〉では〈sentir〉は身体の〈ressentir（反射)〉の sens に対する〈精神〉の〈働きかけ（能動)〉であったし，sentiment を生み出す原動力でもあった。だから次回に明かすが，このことはその〈sentir〉をはじめとする〈精神〉の諸能力（たとえば〈想像する imaginer〉がかかる sens に対し〈働きかけ〉て〈想像 imagination〉を生み出すであろう）も〈sentir〉と同じことにならねばならないことを示唆する。ところが◎②の《エリザベトへの手紙》が意図する〈日常的用法〉では，〈意志〉さえ含まれる〈いかなる能動もなしに〉という上記に従う以上は，〈精神〉のあらゆる能力はそれぞれかかる同じ sens に対し〈働きかける〉ないしは〈受け入れる〉ことをせずに済むことになる（これはだから，〈真理の探求〉とは異なる sentiment，身体をよりどころにした心身合一のそれと読む必要

があろう)。それではあらゆる能力，とりわけここでいう sentiment にかかわる〈sentir〉が〈働きかけ〉ずに済む事由とは何んであろうか。

それは〈日常的用法〉の〈精神〉にあって，sens が先の語句でいえば〈取り入れられる〉こと，換言すると同様に〈受け入れる〉というに対しては〈受け入れられる〉こと，とどのつまり◎②の〈受動〉になるからである。デカルトにとって，〈日常的用法〉では〈精神〉の諸能力の〈働きかけ〉たる〈能動〉を除外させることが前提になるならば，〈精神〉が〈日常的用法〉の〈精神〉として存立するためには〈精神〉に〈真理の探求〉の〈能動〉に代わり得るこの〈受動〉がなくてはならないはずである。その〈受動〉こそ〈精神の感覚 sentiment〉といってよい。だから〈受動〉は sentiment なのだ（これは sentiment が先に〈sens そのものを意味する〉と記したことと同様である)。〈受動〉の sentiment が〈日常的用法〉の身体をよりどころにした心身合一において，〈認識の起こり〉の能力になる（◎②の〈外的感覚〉と〈内的感覚〉がもとよりこの sentiment に相当し，ここから〈真理の探求〉以外での，デカルトにあって二つ目の sentiment があるとみなされる)。それゆえデカルトは sentiment が◎③で〈精神と身体の合一，かかる混交から生じ〉と記したり，◎④でこの〈感覚は...精神に由来する〉と語ったりするわけである（ここには〈精神〉をよりどころにした心身合一の sentiment については除外してある。そこでは passion は〈情念〉の意味に限定される。一方の心身合一の passion は〈受動〉の意味に限定されよう)。

ところでデカルトはこの〈能動と受動〉に関して，さらに〈能動と受動とは常に同一のことがらであるのをやめない〉[31]と語る。むろん〈能動と受動〉を可能にするのは，〈真理の探求〉で〈日常的用法〉のおのおのですでに触れた通り，何より〈精神〉である。そのとき前者における〈能動〉とは〈精神〉において，sens を〈sentir〉によって〈受け入れる〉ないしは〈働きかける〉こと，後者における〈受動〉とは〈精神〉において，sens が〈受け入れられる〉また〈働きかけられる〉ことでしかなかった。それゆえ当初は，〈真理の探求〉は〈能動〉の能力，〈日常的用法〉の一は〈受動〉の能力で満ちた〈精神〉をかたちづくることになる。別言するとこの〈精神〉は各立場のそれぞれが〈能動〉〈受動〉という〈思惟の動き〉や〈認識の起こり〉を語るし，同じ一人が二つの〈精神〉をもち，それらが彼にあって同時でなくあらわれること

を示すにすぎない。だが註(31)での主張はこの二つの〈精神〉とはまた別の〈精神〉を浮かび上がらせはしないか。註(31)の〈同一のことがら〉のさすところが〈精神〉に帰すし，それらの能力が〈同一〉とみなされるならば，〈精神〉は以上のそれぞれと異なった，しかも〈能動〉と〈受動〉の両方を保有する能力のある〈精神〉となりはしないか。註(31)はだから〈能動〉すなわち〈受動〉といい得る。これこそ〈精神〉をよりどころにした心身合一をさす。三つ目とする〈精神〉にはかかる〈日常的用法〉があり，その〈精神〉は時間的経過なしに捉えられない（この時間的経過とはここでは能動が受動にかえられるところに要するそれをさす。また〈真理の探求〉や〈受動〉の〈日常的用法〉の〈精神〉に対しても時間的経過について問うことができるが，これらのことは次回に回すこととする)。それはともかく，この〈能動と受動〉をもって〈精神〉をよりどころにした心身合一の証しになるという三つ目の〈精神〉も同じ一人が所有するそれでしかないが，これがたとえば〈同じ一つの精神〉ともみられる必要があるのは，三つ目の〈精神〉が〈真理の探求〉と〈受動〉の〈日常的用法〉をかねそなえる〈精神〉であるからにほかならない。別言すると三つ目の〈精神〉はこれら二つによって，あたかも混在させられる〈精神〉になっているということである。

これは〈真理の探求〉自体や〈受動〉のみの〈日常的用法〉自体のおのおのに〈能動と受動〉をともに含意させることを示してはいない。時間的経過を考慮せずにいうと，前者の〈真理の探求〉は身体の〈ressentir〉，ならびにその sens を排除する（それのみか，次回にみるように〈精神〉の〈sentir〉，その sentiment さえもが排除されよう）し，後者には〈能動〉の能力が欠けるからである。それでは註(31)の三つ目の〈精神〉はどうか。つまりこの〈日常的用法〉としても記される《情念論》にあって，〈精神〉の能力が〈能動と受動〉の両方を保有することはいかに理解されるかである。筆者は三つ目の〈精神〉が〈精神〉をよりどころにした心身合一の〈日常的用法〉であるとみるのは，身体の sens が〈精神〉に受け入れられる身体をよりどころにした心身合一の〈受動〉の〈日常的用法〉に比して，身体の〈精神〉への部分的関係があるからだと記した。後者の sens は〈精神の感覚〉としての sentiment になる。だが三つ目の〈精神〉での〈精神の感覚〉は，〈能動と受動〉なしには生み出されない。だから以上の二条件のもとの〈精神〉ではまず〈思惟の動き〉たる

〈能動〉の一能力が働きかける必要がある。一能力はまた〈同じ一つの精神〉のそれとして受け入れられる。この〈能動〉の〈受動〉が sentiment だ（これが筆者のいう三つ目のそれ，◎①の情動，また情念にもなる）。さらに〈真理の探求〉や〈受動〉の〈日常的用法〉はそれぞれ〈思惟の動き〉，〈認識の起こり〉が当初あるだけになろうが，三つ目の〈精神〉は最初に〈思惟の動き〉を，次に〈精神の感覚〉としての〈認識の起こり〉を生じさせる混在様態をかたちづくることになる。そしてここにこそ〈思惟の動き〉たるあらゆる〈能動〉の能力を sentiment（受動）にする，デカルトの凝縮された思想が見出されるのだ。

こうして，デカルトは三つ目の〈精神〉にとって，◎①の〈精神にとりわけ関係づけられる情念〉や◎④の〈感覚は...精神に由来する〉にもっともふさわしい（〈精神〉のみに帰する）〈受動〉ないしは sentiment が，◎②の〈外的感覚〉や〈内的感覚〉以外にあることを取り上げてくる。そしてこの〈精神〉のみに帰する〈受動〉ないしは sentiment がまさしくデカルトの主張したかったであろう〈情念〉となる。

Ⓟ①On les (les passions) peut aussi nommer des sentiments.[32]（括弧内筆者）

わたしは情念をまた感覚と名付けることもできる。

Ⓟ②On a coutume de le (ce mot des passions) restreindre à signifier seulement celles (les perceptions) qui se rapportent à l'âme même.[33]（括弧内筆者）

情念なる語は，精神そのものに関係がある知覚だけの意味に限定させ（て使う）のがわたしの習慣である。（括弧内筆者）

Ⓟ③On les (les passions de l'âme) peut nommer des perceptions lorsqu'on se sert généralement de ce mot pour signifier toutes les pensées qui ne sont point des actions de l'âme ou des volontés, mais non point lorsqu'on ne s'en sert que pour signifier des connaissances évidentes.[34]（括弧内筆者）

わたしが知覚なる語を，明証的な認識を意味するためだけに使うのではなく，一般的に，精神の能動すなわち意志では少しもないすべての思惟を意味するために使う場合に，わたしは精神の情念を知覚と名付けることができる。

Ⓟ④Que pour connaître les passions de l'âme il faut distinguer ses fonctions d'avec celles du corps.[35]

精神の情念を認識するには，精神機能を身体の機能と区別せねばならぬこと。

Ⓟ①から④までを参照すれば，〈精神〉のみに帰する〈情念〉すなわち〈精神の情念〉が何か知り得るであろう。その補助となる説明が次に試みられる。まず，Ⓟ①は先に〈受動〉ないしは sentiment と記した事由を明らかにするだけに引用される。そして，筆者はこれまで数回〈知覚〉という語を使用したが，このⓅ②やⓅ③の〈知覚〉でもって，デカルトの指摘するすべての〈知覚〉の意味が出揃うことを強調したい。この一はⓄ①の〈精神の知覚〉としての〈知覚〉である。これはまたⓅ②の〈知覚〉，Ⓟ③の後半部分の，つまり〈一般的に〉以下にある〈知覚〉でもある。ただし〈一般的に〉以下での〈知覚〉はそれ以外の〈知覚〉すら意味させる。それが二である。二は前紀要引用文①であり，本稿ですでにみた文章中の〈運動はわたしたちによって，まさしくわたしたちの感覚 sentiment，すなわちわたしたちの感覚（的印象）sens たる知覚と呼ばれる〉とする〈知覚〉なのである。別言すると〈感覚（的印象）たる知覚〉とは〈精神〉にとっての〈外的感覚 sentiment〉や〈内的感覚 sentiment〉のことである。さらに三がある。三はⓅ③の前半部分にある〈明証的な認識〉をさして使われよう〈知覚〉である。要するに〈真理の探求〉や〈日常的用法〉のいずれにも該当する〈精神〉の〈認識の起こり〉や〈思惟の動き〉のすべてにかかわるのが，デカルトのいう〈知覚〉である（なおⓅ④の〈connaître 認識する〉はこれまでのそれに従った訳にすぎないが，ここでは当然〈経験する〉または〈味う〉の意味しかないことを断っておく。またⓄ②やⓅ③中の〈すべての思惟（あるいはⓄ③の〈思惟様態〉，Ⓞ②の〈思惟〉）という表現が何を語るかは，次回で再度（すでにⓙ①②③の引用文以降の本文で一見はしている）検討する）。

ともかく，問題はその〈精神の情念〉とは何か確認するところから生じてこようか。〈精神の情念〉は，〈精神〉の〈能動〉たる能力，たとえば〈意志する〉が〈働きかけ〉たあとで（だからこの場合は〈意志する〉が他のいかなる能力よりも素早く〈外的感覚〉や〈内的感覚〉のいずれかに〈働きかけ〉ていることでなければならぬ），この先立った〈意志〉能力を今度は〈精神〉のなかだ

けで〈知覚〉して（またはかかる〈意志〉能力が〈受動〉として〈受け入れられ〉て）生み出されるという。これはしかし，〈精神〉のなかであたかも時間的経過によって生まれる〈情念〉でしかない（〈認識の起こり〉としての〈受動〉ではある）し，さらにたとえば感覚や感情に思惟が〈働きかけ〉てもたらされよう感覚的思考や感情的思考のように，〈情念〉に他の能力の〈働きかけ（能動）〉が介在して生じることによる〈情念〉でもない。筆者は後者のことはデカルトのいう〈精神の情念〉にとってあり得ないとみると同時に，そこまで論じるのではないといっておく。

なぜあり得ないか。〈精神の情念〉は本来先立つ〈能動〉たる能力が〈受動〉になるしかないように察知されるからである。しかし筆者からすると，それがさらなる問題を惹起させるのであって，これこそ論じてみなければならぬところとなる。この問題点が以下簡潔に記されるにせよ，それを論じるのは規定枚数に達した段階では次回に譲る以外になかろう。その問題点とは，一，〈精神の情念〉が先立つ〈能動〉たる能力とかかわって生み出されることは，〈精神〉に〈真理の探求〉の〈能動〉と〈日常的用法〉の〈受動〉を混在させることであるが，この〈精神〉の混在様態をもって，筆者は三つ目の〈精神〉とみなすにしても，そこから何を読み取り得るか，二，その三つ目の〈精神〉には，前段で触れたこと，つまり感覚的思考や感情的思考などのように，〈情念〉に他の〈能動〉たる能力が〈働きかける〉ことはまったくないのか，別言すると，三つ目の〈精神〉は〈真理の探求〉や〈日常的用法〉とは別の，〈情念〉なる感覚 sentiment（この感覚は〈真理の探求〉のそればかりか，〈日常的用法〉の〈外的感覚〉や〈内的感覚〉たる sentiment とも異なる）に〈働きかける〉〈思惟（知覚）の動き（展開）〉を可能にすることを示唆させるのか，三，〈情念〉を基本にした三つ目の〈精神〉ではたとえば◎③の〈内的感覚〉（あるいは〈外的感覚〉でもよい）における心身合一のようなそれが果たして可能なのか，これを考察するとき，《情念論》中の一箇条であるⓅ④とは，その箇条内の一文〈精神において受動であるものは通常，身体において能動である〉[36]とは何を語るのか，四，そこには当然〈受動すなわち能動〉（また〈能動すなわち受動〉も同じ）なるデカルトの捉え方があるが，それは何か，である。要するに以上はデカルトのいう〈精神〉が何かを問う中味となるであろう。

〔続〕

註

今回の参考文献は以下の通りであり，各註はその文献に付した記号A.－B.に従う。

A. Descartes《Œuvres Lettres》Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard.
㋑《Discours de la méthode》
㋺《Méditations》
㋩《Les principes de la philosophie》
㋥《Les passions de l'âme》
㋭《Lettres choisies》
B. 新潟大学人文学部人文科学研究，第93輯，1997年。

(1) A.㋺P.278。
(2) A.㋺P.284。
(3) A.㋺P.331。
(4) A.㋩P.596。ここには〈様態〉がまた《属性 attribut》でもあり，《性質 qualité》でもあることが，それらの使用の際の意味区分が記されてある。
(5) A.㋺P.279。
(6) B.P.36Ⓒ註(24)参照。
(7) A.㋥P.P.710－711 ART 31, 32 etc。
(8) A.㋑P.164㋺P.331。
(9) A.㋥P.707。
(10) B.P.36Ⓒ註(24)とP.41Ⓗ註(34)参照。
(11) 本文Ⓙ①註(1)とⓙ②註(2)参照。またB.P.40Ⓖ註(33)参照。
(12) デカルトのいう〈運動〉には《mouvement du corps（身体運動）》(A.㋥P.714 ART 38) と本文註(9)の〈運動〉がある。今日的にいえば前者が遠心性神経，後者が求心性神経になろうか。本文では後者についてのみ言及している。
(13) A.㋑㋺㋩㋥㋭がその調査対象となる作品である。
(14) A.㋺中P.279, P.298, P.300, P.320, P.321, P.328, P.331, P.332（2箇所），P.333の計10回の〈ressentir〉の使用がある。
(15) A.㋺P.279。
(16) A.㋺P.320。
(17) A.㋺P.331。
(18) A.㋺P.332。
(19) A.㋺P.328。

(20) A.㊐P.331。
(21) A.㊐P.321。
(22) A.㊐P.321。
(23) A.㊅P.596。
(24) 前紀要の引用文のうちⒷとⒽに，本文の引用文のうちⒿ①②③，ⓀとⓁに〈sentir〉がある（またⓂ①②は〈精神〉の〈ressentir〉がある）。
(25) 前紀要の引用文のうちⒷ，ⒻとⒾに，本文の引用文のうちⓂ②に sentiment がある。
(26) A.㊁P.P.708−709。
(27) A.㊘P.1212。
(28) A.㊐P.326。
(29) A.㊅P.612。
(30) 〈精気のある独自の運動 quelque particulière agitation des esprits〉中の agitation は本文註(26)の引用文後に出てくる〈quelque mouvement des esprits〉の mouvement（運動）の訳に置換した。
(31) L'action et la passion ne laissent pas d'être toujours une même chose.... (A.㊁P.695)。
(32) A.㊁P.709。
(33) A.㊁P.708。
(34) A.㊁P.709。
(35) A.㊁P.696。
(36) Ce qui est en elle (l'âme) une passion est communément en lui (le corps) une action.（括弧内筆者）A.㊁P.696。